



電信は バテレンの魔術

はじめに
明治5年(1872)4月に発行された新聞に、『電信線には處女の生血を塗る』という物騒な見出しで次のような記事が掲載されました。

「西國ヨリノ報来ニ付、安藝長門邊ニテ種々ノ邪説ヲ生ジ、機線ヲ以テ音信用便ヲ達スルハ、是ゾ所謂切支丹ニ相違ナシト、且機線ニハ女子未嫁者ノ生血ヲ塗り用ユル由、則チ軒口ニ記セル戸數番號ノ順次ヲ以テ、處女ヲ召捕ラルベシナド、暴説風傳シ、或ハ處女ニシテ俄カニ齒ヲ染メ、眉ヲ卸ス者アリ又ハ電信本杭機線等ニ毀損スル徒アリテ、人心恟恟之ガ爲頑民煽動ノ勢ヲナシ、實ニ浅間舖次第ナリ。」
広島や山口などの西国では、電線はキリシタンの魔法であり、この頃に割り振られた住居番号は未婚女性を捕らえるためのもので、その番号順に生血を搾って電線に

塗るといふ流言が飛び交ったというのです。そのため未婚女性は、既婚者に成りすまそうと齒を染めて眉を剃り、あるいは電線や電柱を破壊する者があらわれるなど、パニックに陥ったことが報告されています。どうしてこのようになつてしまつたのでしょうか。



大森付近の電信架設工事

電信創業

日本初の電信は、開港によつて諸事雑多となつた横浜・東京間の通信を迅速にするため、神奈川県知事の寺島宗則の建議によつて、横浜裁判

所から東京築地運上所間に電線が敷かれ、明治2年(1869)12月に創業しました。この後、国内では驚くべきスピードで電信建設が進められ、わずか5年後には北海道と九州が電線で結ばれました。

開港地近郊の状況

ところで、当時の有力な土木建築請負人であつた高島嘉右衛門の談話に次のようなものがありました。
「或る朝知事寺島氏(前記の寺島宗則)に面會せしに、當時京濱間に初めて電信開通したる際にて、世人は頻りに不思議に感じ大いに怪しむべきこととなりとて毎夜電線を切斷すること絶えず寺島伯と對話中にも、下役人は知事の前に來り、昨夜も何箇所切斷せられたり云々と報告し・・・」
どうやら、建設当初から電線は頻りに切斷されていたようです。電線

まさに民衆の生命を脅かすバテレンの魔術に他ならなかつたのです。

廃藩置県

そんな民衆をよそに、新政府は次々と文明開化を推し進めました。特に反感を買つたのは明治4年7月の廃藩置県であり、さらに恐怖を煽つたのは徴兵制でした。

廃藩置県が行われ、藩主たちは東京への移住を余儀なくされると、各地で藩主を引き止めるための一揆が勃発しました。明治4年8月に広島で起こつた「武一騒動」では、数千人の民衆が藩主を引き止めるために広島城へ押し寄せました。そのとき、民衆を暴動に駆り立てたのは、「藩主に代わつて政治を行うのは西洋人であり、手先となつた庄屋たちは、15歳から20歳の女性と飼ひ牛を西洋人に売り払う」といふ流言だつたといひます。

「血税」の誤解

さらに明治5年11月に徴兵告諭が發せられると、民衆は恐怖におののきました。なぜならそこには「血税」といふ言葉が用いられていたのでした。これは、フランス語の「impôt du sang」の直訳であり、よくするに徴兵制を指す言葉なのですが、これを字のとおり解釈した「西洋人に納めるために生血が搾られ

建設にも関わつたお雇い外人R・H・ブランドンの記述を見ると「電信の移入は、刀を振り回す機会を求めていた狂信的なサムライによつて数本の電柱が切り倒された事件があつたほかは、一般市民から敵意なく受け入れられた。」とあり、切斷事件の多くは攘夷論者の仕業のようです。そのほかの民衆といへば、電線を手紙が伝うと勘違いして一日中電線を眺めていた、などという牧歌的な話が見られるなど、西洋人やその文明に触れる機会が多い開港地近郊では、仕組みこそわからなくとも、西洋文明を比較的抵抗なく受け入れることができたようです。

廃仏毀釈

しかし、開港地から遠く離れた地域のの人々にとっては、勝手が違つたようです。明治維新によつて、幕府と代わつた新政府は、急速な政治改

る」といふ流言が広まつたのです。

デマゴーグの出現

この後、各地で「血税一揆」と呼ばれる騒擾事件が起りました。これは徴兵制をはじめとする新政府政策への反感から起つた一揆ですが、明治6年5月に美作で起つた一揆の首謀者の口述書を見ると「流言ヲ以衆心ヲ誑惑シ」、さらに実弟に白衣を着せて村に出没させ「血取りニ來ル也ト呼立」とあり、デマゴーグとして民衆を煽動したことがわかります。

こうしたデマは荒唐無稽であり、当時にあつても平常の生活下であれば、このような事態になつたとは思えません。つまり、それだけ西洋文明と文明開化政策が民衆の理解を超えた脅威だつた、と言える証しなのでしょう。

おわりに

これらは笑い話のようですが、当時と似たような状況がつい最近、私たちの身にも起こりました。
M9の大地震と想像を絶する大津波、そして原発事故は、私たちが体験する未知の大災害であつたため、まだ見ぬ西洋文明の脅威に惑わされた明治の人々と、本質的に全く変わらない状態に陥りました。その結果、震災発生からしばらくの間、ネット

を中心にさまざま流言・デマが飛び交い、標的となつた政府や団体等に抗議や中傷が寄せられるなどの混乱をきたしました。左の表は、その頃の主な流言・デマをまとめたものです。さすがに荒唐無稽なものはないですが、なんの根拠もないデタラメであることは「生血」や「妖怪」と変わりがあります。こうした流言・デマは、救援活動に支障をきたし、生命を脅かす危険さえはらんでいます。ツイッターやブログによつて個人が情報を発信しやすい現代においては、流言・デマは簡単に拡散していきます。平成23年11月25日に政府の地震調査委員会は、今後30年以内に三陸沖から房総沖でM9クラスの地震が起る確率は30%と発表しました。さらなる大地震も予測される今、防災対策の一環として私たち一人一人が情報リテラシーを高める必要があることを実感しています。
(文：江口知秀)

東日本大震災に伴う主な流言・デマ

製油所の爆発により、千葉県下に有害物質の雨が降る。
埼玉県の水が放射性物質で汚染されている。
ヨウ素を含むうがい薬が放射能に効果がある。
外国人の犯罪が多発している。
性犯罪が激増している。
避難所で子どもが餓死している。
日本では救援物資の空中投下が認められていない。
天皇陛下が京都御所に避難された。
大震災は地震兵器による攻撃である。

荻上チキ「検証 東日本大震災の流言・デマ」より



日本人絵師の描いたペリーの肖像。まるで妖怪のようだ。(横浜開港資料館 所蔵)